# 第1回 JASTRO地域貢献賞を受賞して

福島県立医科大学　保健科学部　診療放射線科学科　佐藤 久志

第1回 JASTRO地域貢献賞を頂きました経緯について簡単に報告させていただきます。

私は、福島県生まれで福島県立医科大学を卒業後、持病のため身体的負担が軽いと噂された放射線科学講座に入局後、大学病院での診療を行ってきました。現在、新設された保健科学部に移籍し、大学病院での放射線治療業務に加え、診療放射線技師の教育にも参加しています。

1990年代、県内の治療専門医数は1-2名であり、治療水準も決して高いものではありませんでした。県内初のJASTRO専門医を取得後、治療水準の改善を目標に大学のみならず県内の病院での教育・指導を行ってきました。2005年NEWS LETTER 77号“認定医の少ない放射線治療の現状－福島県の場合－”の記事を読み直すと当時の厳しい状況を思い出します。2008年、持病の悪化により進行肝臓癌に罹患、TACE療法後に兄から生体肝移植術をうけ、4ヶ月後にはなんとか診療業務に復帰、幸運にもサバイバーとして診療を継続する事ができました。2011年、福島第1原子力発電所事故が発生、発電所内作業者や住民の汚染傷病者への対応を行うため、緊急被ばく医療対応チームを立ち上げ、放射線の人体影響の専門家として活動しました。超急性期には、県内の被ばく医療環境確認と再構築を行いつつ、発電所内診療所での診療にも参加しました。同時に、治療中の放射線治療患者対応のため県内外の施設連携や、混乱した大学病院内でのクライシスコミュニケーション対応、院内環境の整備・放射線教育等を行う必要があり、心身的に極限状態のもと密度の濃い一ヶ月を過ごした記憶があります。急性期対応が落ち着いてくると、政府の情報発信の失敗と、様々な専門家から情報発信が行われ、放射性物質汚染による人体影響に関する情報混乱が生じてしまいました。様々な団体から講演要請があり、リスクコミュニケーション活動に参加、10年間で200回以上の講演活動を行いました。住民団体、行政組織、県外の大規模会場での講演など、対応する場所は多種多様に変化しましたが、その業績が認められ大臣表彰をいただく事ができました。2014年、鈴木義行主任教授のもと放射線腫瘍学講座が独立し、放射線治療医のリクルート・教育が強力に進められ、大学のみならず、県内の治療医数の増加、施設整備が進み、福島県では全国でも有数な環境整備が進みました。“充実した治療環境での放射線治療－福島県の場合－”が書けるまでに変化した福島県内の変化を目の前で見ることができた幸せは、今回の受賞でさらに強く感じることができました。

最後になりましたがJASTRO理事長、推薦委員長、学会大会長様、関連スタッフの皆様に深く御礼申し上げます。今回の受賞をうけ、更なる福島県の放射線治療の水準向上や治療スタッフの充実を進めてゆく所存であります。

急性期に発電所内で仲間と全面マスク（チャコールフィルタ）にタイベックを装着。空間線量率が1mSv/hを超える場所がたくさんありました。

県内の住民向けの勉強会
急性期であり、怒りの質問に対して傾聴するしかありませんでした。